

小鳥たちへの説教

聖フランチェスコと自然



ジュリオ・マンチーニ ofm

目次

誤解に対する注意	4
今日の地球という惑星の問題を前にして	7
フランチェスコ: 人としての新しい在り方	10
a) 感嘆と喜び	12
b) 敬謙の情	13
c) コルテジア	17
d) 兄弟として交わること より小さき者として生きること	20
未来の人	23

小鳥たちへの説教 聖フランチェスコと自然

兄弟ジュリオ・マンチーニ ofm

『スポレトの谷を通り抜けながら、フランチェスコがベヴァーニャにたどり着くと、そこで、白い鳩やカラス、シギ...等あらゆる種類、そして、おびただしい数の小鳥たちが群れているのを見ました...』

フランチェスコの小鳥達への説教、この美しい逸話への愛着からフランチェスコ帰天の2年後、この逸話の文書化が試みられ、第一チェラノの58とこれに続く一連の書物が残りました。さらに一世紀半以上の時間を経て、今度は小さき花の第16章において、この逸話は俗語化（当時の一般庶民が日常話していた普通の言葉）されました。それは実に魅惑的で抗しがたい力を備え、フランチェスコの人間味溢れる数々の逸話の中でも、おそらくはその魅力を最もよく伝える逸話として詩人や芸術家、また一般民衆の想像の世界、皆が一緒に分かち合える普遍的な想像の世界に深い感銘を残しました。こうして、フランシスカン世界の地勢の広がりを示す一大叙事詩に、ベヴァーニャとカンナラの名が永久に標されることになったのです。

誤解に対する注意

さて、これから「小鳥たちへの説教：聖フランチェスコと自然」というテーマを語るにあたって、誤解を招きやすい要点を先に述べておきましょう。

まず、フランチェスコは、実は今日私たちがそう呼び慣れ一般に定着している、いわゆる「自然」という言葉が示す風景を知ることにも、そこに足繁く通うこともありませんでした。この「自然」は、アリストテレスに始まり、哲学、神学、科学、言語学、また、様々な文化にまたがって定義づけられたいとも高貴な言葉ですが、フラ

ンチェスコはこういう意味での「自然」を知りません。フランチェスコにとって存在しているのは、*被造界* であり、創造のみ業であり、被造物なのです。しかも、その一つ一つが独立した個々の存在であるかの如くフランチェスコが意識したことも、親しんだことも決してありませんでした。彼にとって被造物とは、全能の創造主であり、すべてを取り計らって下さる生ける神のみ手からたった今出てきたかのように、生き活きとした鼓動を持ついのちある存在です。御父はそれらに生命の息吹を与えながらも、御自分とは全く別個の存在である被造物を、御自身を躰す目に見えるしるしとなさいました。また、目には見えない御父のみ顔の輝きを映し出す存在、私たちの手で触れられる存在としてお示しになり、さらに、御自分の美しさ
と善の鏡、御自身の存在のオーラとしてお示しになっているのです。フランチェスコは被造物を神の手のひらの上に見つめると同時に、彼らと一緒に生きる喜びを分かち合って踊ることができるよう、神御自身がその出遭いを用意して下さった存在であるかのように大切にしていました。そして、父としての慈愛に満ちた神のお取り計らいの数々、即ち、神のみ言葉、神のみこころ、密やかで活動的な神の現存や神の愛の御計画などをそこから汲み取ることができるように、今この瞬間に神がフランチェスコに送り届けて下さった存在として喜び迎えていたのです。他年、ボナヴェントゥラはこのようなフランチェスコの姿勢について神学的に解説しています。

自然ではなく、*創られた世界*。これは大きな違いです。どんな違いかですって！ただ単に文化的側面（フランチェスコが中世の人間であることはいつまでも変わりません）から生じる違いではなく、それは本質的なことです。創られた存在という事が暗示するのは、喜びに満ちた観想や霊的一致と共感、また、兄弟的交わりを相互に関係させながら互いを見通すような生き生きとした関わりです。

それでいて、フランチェスコにとって、この関わりはキリストの現存を深く帯びているのです。ボナヴェントゥラは大伝記の第8章の6でこの点を強調しています。

『かれは、キリストの慈しみ深いやさしさの自然な反映を示し、聖書においてキリストを象徴している被造物を、特別な愛とやさしさをこめていつくしんだのである。』

被造物はそれぞれに固有の在り方や独特の仕方で、それ自体がキリストの存在を思い起こさせます。焼印のように、主のみ顔の特徴を己に刻み付けていると言えます。でもそれは、創造者であるロゴス - みことば *Logos-Verbo creante* の表現、つまり、みことばの種子を宿した存在 *semina verbi* (これをボナヴェントウラは、神から授かり、人間の心に種として備わっている理性 *rationes seminales* と呼んでいます) としてではなく、御自分のアイデンティティと使命を伝えることによって、御自身の姿をお示しになろうとした神であると同時に人であるお方、キリストのイメージとしてです。これら被造物と出会い係わるということは、フランチェスコにとっては愛するお方のみ顔の面影とみ業の足跡を宿すものに巡り会う事でした。すべてにおいてキリストとの愛情深い関係を築き上げていこうとする作用がフランチェスコの内に働き、彼を動かしていました。これこそがまさにフランチェスコらしさ、フランチェスコの個性です。まぎれもなく、これが彼の人間性と聖性が天与の賜物であり、本物であることを示す特性の一つなのです。

もう一つ払拭しておきたい誤解の元があります。フランチェスコの中には、ロマンチズム(情緒主義)、耽美主義、自然主義、センチメンタリズム(感傷主義)、環境主義、動物主義、退廃主義、この類に加担するような傾きは何もありません。フランチェスコは恋に陥ったロマンチストでもなければ、息も絶え絶えに美に溺れているのでもなく、気取った流行の詩人でも、退廃的で田園抒情にひたっている安っぽい感傷家でも、現実離れしたユートピア(理想郷)を説く夢想家でも、現実逃避家でもありません。環境保護家でもなければ、動物に夢中になっている哀れな人でも、今流行のエコロジストでも、緑を守る党员でも、ヒッピー推奨者でも、絶滅の危機に瀕する動植物を守る活動家でも、より「清潔な世界」の推進保護者で

もありません。他にもいろいろあるでしょう。フランチェスコこそ、皆にとって本物の人間主義の最高の姿、モデルでありながら、一方では、何でも可能で、何でも言えて、何にでも調法で、何にでも箔をつけられる人だからです。しかも、なんと彼は聖人なのです。彼に対する誤解はこれだけ列挙すれば十分でしょう。

フランチェスコはキリストへの情熱的な愛に燃える人です。キリストは事物の起源であり、みことばが人となられたように、すべてのものを御自分に似たものとされました。それゆえに、フランチェスコはありとあらゆる事物をキリストのしるし - 思い出 - 記念 - 面影として愛し、見つめ、扱うのです。キリストなしでは、フランチェスコの意味はなく、存在さえせず、全く無に過ぎません。フランチェスコの本質とは何か…。単純で馬鹿な *simplex et idiota* この男は、自分の生命を昇華していく中で自己を空っぽにして全く新たなもので満たされ、贖いのみ業に襲われるままに任せました。そして、このように貧しく謙遜な彼の人間性を用いて、聖霊は完成した人間性、キリスト的人間性の先駆けを作ることが出来たのです。それと共に聖霊は、フランチェスコを最初のアダムの状態 *status* に戻しました。つまり、エデンの園に在った時、罪を犯す前に神がお創りになったすべての物に名前をつけていた頃の清浄無垢な状態に戻しました。そこでは“すべてが良かった”のです。

今日の地球という惑星の問題を前にして

小鳥たちへの説教 聖フランチェスコと被造界というテーマを進めましょう。聖フランチェスコと被造物です。フランチェスコは、被造物の賛歌もしくは兄弟なる太陽の賛歌と呼ばれる賛歌を吟遊詩人のように人々に歌いかけるようにと、サン・ダミアーノから兄弟たちを送り出していました。

『わたしたちは、毎日これらの造られたものを使い、それがなければ生きて行くことができないのに、人類は、その造られたものにおいて、創造主をひどく傷つけているのです。そればかりか、わた

私たちの創造主であり、すべての善いものの与え主である方をたたえようともせず、これほど大きなご好意と恵みに対して恩知らずであり続けているのです』(完全の鏡 100 ; ペルージャ伝 43 より)。

この段階で、問題となる状況 status quaestionis をどのように提示するのがよいでしょうか？抽象的で曖昧な議論はやめ、2000年4月22日の聖土曜日に、ワシントンを中心に催された「アースディ(地球の日)2000」という事実に着目したいと思います。丁度30年前の同じ日に、クリーブランド(米国)のクイアオガで有毒廃棄物を大量に燃やしたあの「炎の河」の出来事は、立ちのぼる有毒雲とともに巨大な連鎖反応を引き起こしました。全米で2000万もの人々が集い、きっぱりと「もうたくさん」と言うために、有害排気ガスは「もうたくさん」、技術がもたらす非人間的状況は「もうたくさん」と言うために行動を起こしたのです。そしてここから、生態環境保全運動の誕生と反環境汚染規制法案の可決をもたらした環境保護運動も歩き始めたのでした。

あの日から30年、ワシントンに集う大祝祭の盛り上がりを受けて、五大陸に広がる約5億前後の人々を巻き込む運動がやっと実現したのです。それは、「自然保護、環境保護こそは、世界中で無視されている最重要問題である」という原則的課題を訴えて怒涛のように盛り上がる社会的運動です。気温の上昇、または「環境の熱」とはマスコミが取り上げる主要なテーマです。

1970年以来実施されてきたこのような努力にも拘らず、相次ぐ見解や報告によれば、地球の輝きは30年前よりはるかに失せています。前世紀末には地球資源の枯渇は明白な事実となりました。木材の消費と紙の使用量(つまり森林の消滅)は6倍に増えました。魚の消費量も6倍、小麦と水の消費量は3倍に、化石燃料の消費量はこの10年間で4倍に膨れ上がりました。この惑星(地球)は、その惨状を訴える声に安閑安穩としていただけません。海洋、森林、大気、水、エネルギー、砂漠化、絶滅の危機に瀕するある種の動物たち、騒音、排気・排水、不法投棄物など、様々な声が聞こえてきます。その緊急性が心配をより一層かき立てます。影響は差し迫っており、生物

の多様性、生態組織や遺伝等を扱う生命工学などは、この2000年、最大の危機です。「自然のバランスに手を加えながら、私たちの食物、身体や精神にどのような影響を及ぼすのか誰も分からないのです。」

それらは、世界的な広がりで国々が関わるレベルや民族・国民で関わるレベル、もしくは、個人レベルの関わりか、いずれにせよ莫大な力を投入して科学的・技術的解決策を講ずる必要のある多くの深刻な問題です。京都の例（訳者註：COP3『地球温暖化防止京都会議』）を見てみましょう。1997年、京都に参集した100カ国が、地球の温暖化の主要因であるガスの排出規制を課す事を決定しました。しかし、抑制の20%を占める当事国である米国の上院は、未だにこの協定を批准していません。とても大きな問題です。技術や法律では、十分ではないのです。相互協力と連帯に向かう考え方の転換、もしくは、新しい地球規模の教育、新しい文化、そういう変化が求められており、それが前提となるのです。

さあ、こんなに複雑で難しい数々の問題を前にして、「聖フランチェスコの小鳥たちへの説教」、第1チェラノの58-59や小さき花の第16章に描かれているあの逸話が、一体、何だというのでしょうか？どんな意味を成しえるのでしょうか？12・13世紀イタリア語詩文の崇高な趣を湛える一篇（実際そうに違いないのですが）だったとしても、そこから何が得られるというのでしょうか？

ところが、実は、これはただの詩文ではありません。これがポイントです。単なる詩文を遥かに超える何かです。それは、ヒューマニズムの新しい形態、人間としての真実で新しい在り方、人間らしくなるための一つの方法、抜本的で斬新な人間学であり、すべての時代、すべての文明の中で人類が生んだ最も崇高な文明にさえ勝る人間らしい生き方のモデルです。ここで再度念を押しておく必要があるでしょう。技術や法律では事足りないのです。フランチェスコの姿にその最高の理想像が見出される新しいヒューマニズム、すなわち、一個の人格を形成し、人類であるための新しく斬新な生き方・在り方が必要とされているのです。

フランチェスコ：人としての新しい在り方

さて、「我らの母なる大地 - *nostra Matre Terra*」が擁する被造物の中で人間についてのフランシスカン的人間学、フランシスコカンの論議にこの節を当てましょう。テーマに沿って、小さき花の第 16 章（それは、14 世紀イタリア文学の貴重な傑作の一つに数えられており、フローラによれば、イタリア史上これよりも偉大な文学作品はあっても、私たちの魂にこれほど大切なものは他にない、とのこと）だけでなく、フランシスカン源泉資料に収められている他の記述、即ち、1 チェラノ 58 と 80 - 83、それに 2 チェラノ 165、ボナヴェントゥラ大伝記第 8 章に次いで、ペルージャ伝 43 - 49、さらに、完全の鏡 113 - 119 へと読み進めてみましょう。ここでは、小さき花の第 16 章（これはおよそ 150 年後に書かれています）よりもむしろ 1 チェラノを取り上げて、冒頭の一句から始めてみましょう。*”Franciscus iter faciebat per vallem spoletanam...prope Mavianum.”* つまり、「フランチェスコはベヴァーニャに近いスポレトの谷を通っていた」ということですが、小さき花では、「カンナリオとベヴァーニャの間に来た」とさらに場所を限定しています。「カンナラとベヴァーニャの間」という場所、これが一体どちらであったかという問題は、この二つの村が美しく平和的に解決しました。まばゆい平原に連なるカンナラをひととき美しく装うのは、ピアン・ダルカ Pian d'Arca という牧歌的風情を漂わせる聖所です。ベヴァーニャの存在を際立たせるのは、小鳥たちに説教するフランチェスコがその上に立ったという岩です。これは地元の聖フランチェスコ教会に保管されています。

ここを散歩していると物語の中でしるしとなっている二つの言葉に気がつきます。カンナリオ、今日ではカンナラと呼ばれるこの地名がまず一つ。明らかに、この地にカンナ、即ち葦が一面に生い茂っていたことを示す地名です。二つ目は、説教を聴いていた小鳥たちの種類を挙げるリストの中にあります。ラテン名で “*mónaclae*”（1 チェラノ 58）、口語で “*monachine*” - シギ - （小さき花第 10 章）と呼ばれる水鳥の名前です。“*canneto*” - 葦の原 - にせよ、

“monachine” - シギ - にせよ、その地が沼沢の点在する低湿地であることを証しています。こうして、この物語の出だし (*iter faciebat per vallem spoletanam* - スポレトの谷を通っていた -) が、 “*nihil jucundius vidi valle mea spoletana*” - 私のスポレトの谷より喜ばしい所は見たことがない - という魅粹的な一節を連想させるとすれば、環境を捉える写實的視点はこの詩的な表現を借りて沼沢地や湿原が広がる実に美しい自然の情景を映し出しています。

エミリア族に割り当てられたローマ帝国の駐屯地であった古の時には、水の豊かなベヴァーニャはラテン詩に歌われるような有名な場所でした。(“*latis Mevania pratis*” 広大なベヴァーニャの牧場

“*laetis poiecta in campis... ingentem pascens Mevania taurum*” 楽しそうに放牧されて...おびたしい牛の群れがベヴァーニャで草をはんでいる) それに引き替え、フランチェスコの時代には、平原を走る溪流や河川に溢れんばかりにほとぼしる水も土地放棄によって流れるがまま放置されていました。それは、クリトゥノからテベロネ、ティミア、トピーノ、リオ、ラットーネ、そして、アイソのフォルマへと達する勢いでした。植物や動物たちにとっての(狩人たちにとっても！) パラダイスは、サンタ・マリア・デリ・アンジェリやバステア (*insula Romana* - ローマの島 -) にまでも広がっていたのです。でも、“*servus glebae*” - 土の下僕(しもべ) - である人間にとっては痩せて硬い土地の生活しにくい所で、農夫たちは中世の都市国家の農業再生のために、たくさんの小さな沼、蚊や昆虫、鳥や動物たちにさんざん苦勞しながら大地と戦わねばなりません。こうして、フランチェスコを駆り立てる福音的激情が、『小さい花』によれば、「道沿いの木々に」留まっていた「限りなく(この表現に注意！) おびたしい数の小鳥たち」に向けられたのも全く無理のないことでした。二つの町(カンナラとベヴァーニャ) の城壁の外にいる人間は少なく、ごくまれなはずでしたから。

フランチェスコに回帰するために、そして、ただ単に人間同士や神との関係においてだけではなく、被造界に存在する被造物たちとの関係における人間としてのフランチェスコの在り方に回帰するために、被造物の世界との関係におけるフランチェスコの振舞いや自

分をどのように関係付けているか、その中にどのような位置を保っているか、フランチェスコの特徴である独自性は何か、そして、どこにあるのかを考えてみましょう。フランチェスコは、今日、(エコロジーの保護者と宣言されたほどに)すべての人々から、特に、あらゆる被造物に係わる環境保護主義者たちから最も好ましくかつ権威ある旗手として、また、最も気高くかつ成功したモデル像として、いやむしろ、自然の動植物が生息する環境との間に人間が持つべき健全で正しい関係を告げる唯一の預言者として知られているようです。もしそうだとすれば、彼の行動や態度に表れる特徴を拾い上げることは非常に重要なことです。全宇宙的ヴィジョンやグローバルな広がりを持つヒューマニズムによる教育学や方法論を解く鍵となるからです。それでは、フランチェスコの特徴の中でも特に肝心な幾つかの点を浮き彫りにして取り上げてみましょう。

a) 感嘆と喜び

何よりもまず感嘆する心。感嘆とは被造界や被造物の美しさ、驚くべき様子を目の前にして陶然となることです。「*Admirans non modicum* 感動しています、ちょっとやそっとではなく。」ありとあらゆる類の鳥達が数知れぬほどに大挙している様相を驚嘆の思いで眺め、しかも、普段ならすぐに飛び立とうする鳥たちが自分を待って飛びたがらない様子を見て、「*ingenti repletus gaudio* 溢れんばかりの歡喜に満たされて」フランチェスコは幸せ一杯になります。

感嘆と喜び。この二つの言葉も価値も決して月並みなものではありません。それどころか、今日、感嘆とは何なのか、もはやそれを知る人はいません。私たちを驚かせ魅了するのは、コンピューターやインターネット、財産や仕事(キャリア)、ポルノなどです。それでも、目と時間がある人ならば、夕暮れや自然の壮大な光景、小鳥たちの群れ、親鳥に抱かれるひなたち、足元でそっと笑いかける一輪の花、そんな美しさに気がつき味わうことができるかもしれません。フランチェスコにとって感嘆とは 私たちに彼の事を語る源泉資料の一言一句のすべてに現れている通り、本能から自然と湧

き上がり、恩恵によって彼の全存在を揺さぶる感動です。それはまさに、成人した男性と少年が同居しているような彼自身の存在が損なうことなく保っていた単純さと生来の純粹さによるものなのです。神の幼子です。

人間に品格を与える豊かで湧き出るような資質のひとつは、まぎれもなく喜びに満ちた感嘆を覚えることのできる心です。ルカの福音は貧しい人々や小さな者たちを喜びで満たします。なぜなら、彼らには、感嘆し、啞然とし、うっとりとして心を奪われてしまう能力があるからなのです。もしも感嘆や喜びがあなたから取り去られたら、富が（たとえジャンボ宝くじの大当たりであっても）一体何の役に立つのでしょうか。感嘆の情を根こそぎにしてしまう文化は、技術者やスペシャリストを輩出し、ノイローゼ患者を生み出すことはできるでしょう、でも、人間を養うものではありません。

b) 敬謙の情

さらに、その感嘆の情から芽生え、様々な情感を支える全く特殊な心の構えがフランチェスコの中に見受けられます。それは、*pietas* - 深い敬謙の情 - です。変化と抑揚に富み、稀にしか見出すことのできない心情が備える特質、チェラノはそれを次のように明らかにしています。「燃えるような愛に満たされた男、フランチェスコは、大きく深い敬謙の情、そして、慈しみに満ちた優しい愛を心に養っており、それは理性を持たない下等な被造物にも向けられていました。（*'magnum pietatis atque dulcedinis gerens affectum'* - 余りにも深く豊かな敬謙の情と甘美な喜びに満ちた感情を宿していた - これは実際には翻訳不可能なほどに深く濃い意味を秘めた言葉・表現です。）一段と濃縮した内容と貴重な価値を持つ文章（大伝記 8 章の 1）の中で、ボナヴェントゥラはこの心情をフランチェスコが持つ根本的で典型的な態度として神学的に意味づけています。

『まことの敬謙さは、フランシスコの心をすっかり満たし、その深みにまで浸透し、信心を通してかれを、神へとひきあげ、同情に

よって、キリストへと変容させ、へりくだりを通して、隣人に引きよせ、普遍的な和解を通して、あらゆる被造物との関係を築かせていました。』

さらに付け足して

『こうして、かれを原初の罪なき状態へと復帰させたのでした。』

Pietas - 敬謙の情 - 。深遠で心の奥まで浸透するような力を持つこの心情は、信心深さ、深い同情を抱いた憐れみ、思いやり、他を受け入れて大切に作る態度、慈しみ深い優しさ、和睦的で優しい情愛に満ちた心の一致による相互理解など、フランチェスコの取っていた態度に込められていた様々な感情を構成し繋ぎ合わせていました。*Pietas* - 敬謙の情 - という、この思いによって、フランチェスコは神に対し、キリストに対し、人間に対して心を開いて接することが出来たし、柔軟性に富む関係を築くことが出来ました。そして、その思いは、当然ながらボナヴェントゥラが描いているように、他の全被造物とのフランチェスコの間でも同じ関係を築く働きを果たしていました。よく見てみると、父として御自分の被造物を大切に思い哀れむ神の思い - *Pietas*、そして、私たち罪びとを大事に慈しみ - *Pietas*、憐れむキリストの思いとがフランチェスコの内に表れているのが分かります。キリストはこの思いに駆り立てられて私たちのために十字架に御自分を引き渡されました。そして、それだけでなく、罪びとや徴税人たちがキリストの愛に与る特権を有する者として心からの信頼をもって御自分に近づくのを許されたのです（ルカ 15:1）。

フランチェスコが他の被造物に近づく際に抱いていたのも *Pietas* - この種の崇高な思い - でした。*Saluto alle virtù* 諸徳への挨拶、フランチェスコが残したあの福音の香り漂うテキストを思い出すのは意義深いことでしょう。その中で、フランチェスコの従順で *Pietas* - 敬謙な思い - は、次のように自分を明け渡すに至ります。

『世にいるすべての人に服従し、人だけでなく、あらゆる獣や野獣にまで服従する。その結果、人も獣も、この人に、主が「上からお与えになる」限り自分の望みのままに行える』(諸徳への挨拶 16 - 18)

キリストに全く一致したフランチェスコの最高に気高い態度です。被造物に対し無防備で、しかも害をなさず、全く献身的で、甘美な優しさ、共感と、感謝と、相手を受け入れ大切にしようという心で満たされた何の見返りも求めない、そんな接し方です。他を受け容れ大切に作る人間、それはフランチェスコの存在の奥深い核心を成しています。フランチェスコは、彼自身が他の存在に無償で与えていた尽きることのない信頼の賜物として、すべてを作り変え変容しながら、ありとあらゆる存在を受け入れる術を身に付けていました。被造界と接する時のこのような敬謙で哀れみ深い態度 - *Pietas* は、一瞬ごとにフランチェスコの内に現れています。情愛に満ちた共感に通ずる深い思い、小鳥たちへの説教にはその思いがどれほど込められていたことでしょうか。優しさでとけてしまいそうなフランチェスコのそんな仕草に秘められた哀れみの愛 - *Pietas* を、ジョットは不滅のものとししました。それは、人々の記憶と心にすばらしい思い出として、いつまでも刻み付けるに相応しく真実で純粋な思いだったからです。

それにしても、フランチェスコはいつもこんな調子でした。近づくのが小鳥たちであろうと、鷹であろうと、雉であろうと、蝉であろうと、最愛のひばり達(ひばりは、小さき兄弟たちの修道服に似た装いで、しかも、餌をついばむために地上にくちばしをつけたかと思いきや、即、空高く舞い上がっていく姿はまるで観想家のようです)であろうと、いつも同じ哀れみの心 - *Pietas* で、同じ態度で接していました。おしゃべりに興じる相手がたとえ水であろうと、石であろうと、木々であろうと、花々であろうと、まだ赤ちゃんの子羊たちであろうと - 子羊キリストのゆえに、幼い子羊たちはフランチェスコのお気に入りでした - 、少し成長した仔羊たちであろうとも、同じ。そして、賛美の思いにかられて見惚れているのが太陽

や月でも、様々な星でも、風や空気でも、雲の多い日や穏やかに晴れた日でも、火でも、母なる大地でも、ともかく、フランチェスコは同じ心・同じ思いで接し、見つめていました。彼のその思いは人間の苦悩や愛、死にさえも及んでいたのです。

さて、それでは私たち自身は様々な物事や自然と対峙して自分をどう位置づけるのがよいのでしょうか？現代という敬謙さと哀れみ - *Pietas* に欠けた社会環境に染まって生きる私たちは誰でも冷酷非情になりがちです。しかもそれに輪を掛けて、前述のように脆弱な価値観のせいで、自他を嘲笑愚弄する意地悪にさえなりがちです。確かに、哀れみの愛 - *Pietas* のように、力強く健全な人間の価値観もこの社会に存在してはいるのです。それにしても、この社会のシステム全体が他者を押しつけ自分だけがのし上がろうと挑み、傲慢尊大に、どんな代償を払おうとも情け容赦なく人の思いを踏みにじりながら、敗者であろうと勝者であろうと情状酌量もせず冷徹に自分をごり押しして目的を達成しようと図っているかのようです。そのような中で、どのように私たちは物事や自然と係わっていけるのでしょうか？

c) コルテジア

さらに、このような敬謙な哀れみの情をフランチェスコの心の縦糸とすれば、そこには美しく光り輝く金糸がちりばめてあります。*curialitas* - コルテジア（訳者註：相手を深く敬い、大切に作る気高く上品な態度とそこに表れる優しく美しい心のこと） - と呼ばれる金の糸です。このコルテジアは、ありがとう、失礼、どういたしましてなどの挨拶のように、いわゆる社会教育によって身に着ける礼儀正しさのことではありません。フランチェスコのスタイルであった騎士的で優雅なコルテジアは、若き日の彼が憧れ、旅立ちの日に夢みていた宮廷的騎士文化の世界をモデルとしたものではなく、キリストの騎士であると自ら感じていたフランチェスコの内的世界に由来するものなのです。これについて、小さき花の 37 章が次のように述べています。

『親切心*こそは、神さまの徳のひとつだと知っておくがよい。神さまが、正しい者にも正しくない者にも、太陽をのぼらせ、雨を降らせてくださるのは、親切心のためなのだ。親切心こそは愛徳の姉妹であって、憎しみを消し、愛を保持させる』(田辺保氏訳聖フランチェスコの小さな花の37章より：*コルテジアは親切心と訳されている)

精神の高潔さや、英雄的な勇氣、誠実さ、忠実さ、鷹揚で寛大なもてなしに関する世俗的な価値観は、損得勘定や利便性の追求を超越した無償で信頼に満ちた福音的価値観と共にフランチェスコの内でもてなす。彼の内にあるすべてを一つにまとめながら人間とこの世界を変えていくのです！フランチェスコが小鳥たちに話しかける時、「主があなた方に平和をお与え下さいますように」という挨拶で始めます。そして、謙遜に彼らに勧めるのです。(謙遜はコルテジアに属しています。高慢に満ちた顔つきや立居振る舞いで、どうやってコルテジアでありえましょう?)

『神さまのことばを聞いてくれるようにと...「わたしの兄弟である小鳥の皆さん、あなた方は、あなた方の造り主を心から褒め称え、いつも愛さねばなりません。そのお方は、あなた方の着る物として羽毛を、また飛ぶために翼を与えて下さっています。空のきれいな所にあなた方の住まいを用意なされ、蒔いたり、刈り入れたりしなくてもよいように、あなた方を守り、心配なさっているのです』(1チェラノ58章より)

これがコルテジアでなくて何でしょう？それに、それぞれの特性に応じて自分たちの大きな喜びをフランチェスコに示す小鳥たちの様子も、です。首を伸ばし、翼を広げ、くちばしを開き、フランチェスコを見つめている小鳥たちはフランチェスコが自分たちの間を(自由に)行ったり来たりさせます。フランチェスコは着ている修道服で小鳥たちの頭や体をかすめたりしていました。コルテジアに

応えるのがコルテジアでなくて、何でしょうか？このコルテジアに満ちた光景（ジョットよりはるかに時代を遡る 1235 年、ペツシャのベルリングエリによって、イコンを模る初期の板絵の中に、すでにこのテーマが描かれている事実を御一考下さい）は、単に偶発的で一度限りの出来事ではありませんでした。これは、被造物に対する情感に満ち溢れるフランチェスコの典型的で常日頃の態度でした。これは彼のスタイルなのです。彼が深く大きな愛情と尊敬を抱いて近づくすべての被造物に対してこのコルテジアを示します。

『誰かが被造物を軽率に（もしくはコルテジアを示さずに）扱うのを見れば、フランチェスコは心を痛めずにはいられませんでした。ろうそくや灯火、あるいは火を消すことをも望みませんでした。それほどに、それら被造物に対するフランチェスコの敬謙な思いと愛情は深かったのです。普通行われているように、燃え残りの薪や炭を捨てようとは思わず、地面に丁寧に並べて置かせたのでした』（ペルージャ伝 49 より）

1 チェラノ 80 が言葉を添えます。『おお、単純なる敬謙さ、敬謙な単純さよ。私はうじ虫であって、人でない と主について語る聖書のみことばのゆえに、実にうじ虫にまで溢れんばかりの愛情を覚えていたとは！』このように、蜜蜂たちのためには、冬に『みつばち達が寒さのために死なないようにと、蜂蜜とワインを用意させていた』のです。

『手を洗う時には、使った水が後で踏みつけられないような場所を選びました（生ける水とはキリストです！）。石の上を歩かなければならない時には、「岩」と呼ばれた方への愛のために、細心の注意を払って進むのでした。…燃やすための薪を切り出す兄弟に、木をそっくり切り倒してしまわないで、一部だけを切り出し、一部はそのまま残しておくように命じました。…菜園系の兄弟には、庭中を耕してしまわず、草花が自然のままに育つよう、庭の一部は空けておくようにと話していました』（ペルージャ伝 51 より）

り)

それは、まるで生きている人間に対するような本物のコルテジアでした。ある夜、サンタ・マリア・デリ・アンジェリにいた時の事です。暖炉のそばで暖まっていたフランチェスコの長い着物の裾に火がつき、気づいた兄弟の一人が走って消しに来ました。『フランチェスコは彼に向かって言いました。「最愛の兄弟よ、どうか兄弟火をいじめないでくれ。」』そして、彼が火を消すのを決して許そうとはしませんでした。さらに、フォンテコロンボで緑内障を患い苦しんでいたフランチェスコに焼灼治療を施そうとした医者が、焼けた鉄ごてを手にして近づいてきた時の事です。フランチェスコは火に向かって語りかけました。『私の兄弟 火よ、どうか今は私に優しくしてくれ。私は、君を創造した主への愛によって、いつも君を愛してきたし、これからもますます愛そう。』そして、火を祝福しました。兄弟たちは（フランチェスコが治療で苦しむであろう事を考え）恐れおののき逃げてしまいました。しかし、治療後に戻ってみると、フランチェスコは「信仰の少ない者たちよ、何の痛みもありませんでした。兄弟 火は私に対し本当に優しくしてくれました」（ペルージャ伝 48 参照）と言うのでした。フランチェスコと被造物の間には互いの心に行き交う相互理解があったのです。

d) 兄弟として交わること より小さき者として生きること

他に何か、被造物と交わるフランチェスコのこのような心情と姿勢が奏で出す楽譜に書き足す調べがあるのでしょうか。そう、あるのです。人間的でいて崇高極まりない繊細な調べ、それは、*fraternitas-minoritas* - 兄弟として愛し交わること・より小さき者として生きること - です。フランチェスコの他者との交わり方、また、彼の人間として在り方、それらの独特で非凡な特徴をどのように言い表せましょうか？すべての特徴を *ad unum* ひとつにまとめあげ、かつ、フランチェスコが関係する他のすべてを言い表す個人的であって福音的な表現とは？「遂には、1 チェラノ 81 は結論します

称賛に値すべきすばらしさでありながら、他の誰にも気づかれていない被造物たちのそんな神秘を洞察していたフランチェスコは、すべての被造物を兄弟・姉妹の名をもって呼び始めていたのです。」姉妹なる私の鳥たち、姉妹なる蝉、兄弟なるきじ、兄弟なるおおかみ、兄弟なる太陽の君、姉妹なる月、姉妹なる星、兄弟なる風、姉妹なる水、兄弟なる火、姉妹であり私たちの母である大地、私たちの姉妹なる肉体の死よ...

ここで注意が必要です。というのは、ここで取り上げているのは、詩的表現法でも、寓話的談話でも、牧歌的詩情の醸し方でもありません。つまり、前アルカディア派風の気取った文体でも、上辺だけの愛嬌でもないからです。それは、フランチェスコにとっては彼の人生と経験に基づく霊的な一致の選択なのです。そして、これら生の現実である被造物に、恩寵によってフランチェスコは、ほとんど人格的と言えるある確かな一つの存在、個人的で客観的な尊厳を持つ存在、親近感と絆の強さを伝える存在を与えています。しかし、決してそれは、支配欲や独占欲、また好奇心を満足させようとする意図を帯びたものではありません。それは、どんな欲望の影さえも全く帯びていないものです！兄弟的な感覚と交わり、まさにそのものです。フランチェスコ自身がそうであるように、全宇宙に広がる神の父としての愛そのものから生まれて来る彼ら被造物を、本当の話し相手として、真の相互関係を結ぶ相手として扱い、接するのです。こうして、同じ血を引く家族に属する同族の絆で結ばれた者として、それも、知性 神学的な認識のレベルではなく、優しい情愛に満ちた感情という心理的、情動的な経験を通して実感した同族の絆に結ばれた者として、彼らを捉えているのです。

重要な考察点があります。すなわち、兄弟や姉妹という呼び方は、明らかに性的な区別を伴うのですが、それは、単に言語が備える文法事項の類によるのではなく、フランチェスコが捉えるそれぞれのイメージや価値観によるものなのです。それは、非常に鋭敏で繊細な判断です。たとえば、太陽や火、風などを、フランチェスコは、生命力の勢いに満ちた積極的な行動におけるダイナミックな活力という観点で捉え、それ故に雄々しい男性像の投影と見るのです。そ

ここで、兄弟なる太陽の君、兄弟なる火、兄弟なる風と呼びます。それに比べ、月や水、大地などを、彼は、実り豊かな受容性という度量を示す存在、そこに映し出される受動的な反映、内的親密性という観点で捉えます。それゆえに、姉妹なる月、姉妹なる星、母なる大地と呼ぶのです。これは文法の問題ではなく、心の深奥で営む観想の問題なのです。

それにしても、もっと重要な事は、実はもっと崇高な事です。*Fraternitas* - 兄弟としての交わり -、兄弟姉妹として生きること、感じる事、関わる事は、フランチェスコにとって、私たちの主イエズス・キリストの福音全体から咲き出る最も美しい花であり、エキスであり、エッセンスなのです。私たちが、肉によるのではなく聖霊によって御自分の兄弟となるようにと願ったいと高き神の御子は、マリアにおいて私たちの優しく甘美な兄弟とされました。こうして、私たち皆にとって真の兄弟とされた御自分において、私たち自身も互いに兄弟として生きるように望んでおられます。

これは、ひとつの現実です。恩恵によって、存在論的には既に私たち自身の存在の内に種として蒔かれている確かな現実ですが、それは行動に移されねばなりません。つまり、私たちの内で成熟し、達成されなければならない現実なのです。それは、*Minoritas* - より小さき者として生きること、自主的により小さい者であること - を条件としています。キリストはどのようにされたでしょうか？私たちのレベルまで御自分を低く卑しめ、自主的に御自分を小さい者とされ、私たちの兄弟とされました。御自分の神性を、人性をとるに至るまで小さくされたのです。弱く、限りある存在である人間になることを真にお望みになりました。これこそ、まさにより小さくなること。キリストこそは最初の小さき兄弟です！

フランチェスコは直感したのです。「小さき兄弟たちと呼ばれ、そうであるように！」もし、あなたの上に立つのなら、あなたの兄弟では決してありえない。私自身を下に置かねばなりません。それによって、あなたが余裕を得て育つことができるように。すべてはこれです、お互いに。そう、お互いに相手に対し、より小さいものであることなのです。そして、これが、*fraternitas* - 兄弟の交わり - と

同じことであり、それが「誰も兄弟の上に立って支配することなどないように。互いに足を洗い合うように」ということなのです。福音による神の認識は、人間関係や被造物との関係の変容と切り離せない：フランチェスコに示された啓示は、この要求を理解し、それによって自分が形作られるにまかせることでした。キリストの内にある者として、より小さい者であるという代価を払って互いに兄弟とならねばなりません。それについて人が何を言おうとも、*fraternitas-minoritas* - 兄弟の交わりと小さき者として生きること - とは、教会における、そして、歴史におけるフランチェスコの新しさなのです。

こうして、フランチェスコは、自分の兄弟的生活の手法を被造物たちや被造界の会話に入り込み、彼らと共に生きることに応用します。それは、彼らの遥か彼方からではなく、高みから彼らを支配し所有することではありません。謙遜とより小さき者であることによって彼らと等しいところまで下りながら、神に仕え神を賛美することにおいて、そして、等しい尊厳をもち、各々の秩序に従いつつ、共に生きることにおいて同等の機会を提供しながら「私の主を賛美し、祝福せよ。大いなる謙遜をもって感謝し、主に仕えよ」と呼びかけるのです。

未来の人

小鳥たちへの説教の物語は、次の一節で締めくくられています。

『いよいよ最後にフランチェスコは、飛び立つ許しを与えながら、十字架の印によって小鳥たちを祝福しました』（1 チェラノ 58 より）

フランチェスコの実に魅力的でいて信じがたいような被造物との関係は、このように作り上げられていきます。つまり、彼らを獲物として扱うのではなく、彼らの生息する場でもっと寛大な自由を与えながら、人間と生存空間を共有するという大いなる喜びに至るま

で彼らを高揚し、人間の所有物たる奴隷の状態にしないことです。「この日から、結論です すべての鳥類、すべての動物、すべての爬虫類、魂を持たないありとあらゆる被造物をも、神を賛美し、愛するようと招き始めました。」彼ら自身だけで賛美し、愛するのではなく、フランチェスコとともに。そう、これから私たちだって、彼の傍らでこのように出来ないということがありましようか？

それは、何でも良かれという態度をとることはありません。それどころか明確な態度をとることを要求します。これは、人間と被造物、人類と被造界の結ぶ関係のモデルです。でも、これは、図書館にある「ユートピア - 理想郷」のような一冊の書物に書かれたモデル論ではなく、日一日ごとに歴史となり、私たちにおいて受肉した体験となった生のモデルです。このモデルは、冒頭で述べた私たちの膨大な問題に対して、その要求に応え得る有効な解答を出すことができるのでしょうか？さて、今こそ、最後まで残った曖昧な点を取り去るべき時です。実は、フランチェスコの分野は別です。この問題に答えることではありません。

フランチェスコは、ここで再確認する必要がありますが 彼の命のすべてをキリストのためだけに費やしたのです。“*ut totus esset Christi*” - すべてはキリストに帰属するように - (ボナヴェントゥラ)。聖痕を肉体に刻まれた彼は苦しみの中で、「貧しく、十字架に付けられたキリストを知っている」と言っていました。そして、このキリストがすべてでした。“*Deus meus et omnia*”「私の神よ、私のすべてよ。」フランチェスコが打ち込んだのは、この惑星に住む人間が抱える様々な問題ではありません。キリストの為にこそ全生涯を懸けたのです。そして、キリストに倣ってフランチェスコにも人間の問題を解決する必要が生じ、その結果として人間と自然に関する諸問題に対する預言的な解決策 - 回答 - を与えることにもなりました。フランチェスコには明瞭な教訓があります。それは、キリストが人間にとっても、被造界にとっても、すべてに通じる解決策であるということです。キリストなしでは、たとえ一つの問題を解決したとしても、もっと多くの問題を引き起こすことになるでしょう。

そうです、彼の分野はもっと別の所にあります。彼の示す人生の

モデルが与える訓戒はもっと抜本的ですし、より広範に亘っています。それで、フランチェスコは私たちを魅了し、私たちの精神を高め、夢を与えますが、同時に、私たちを不安にし、困惑させ、掻き乱し、途方に暮れさせるのです。フランチェスコの兄弟たちでさえ、彼の後をついていくのには全くお手上げの状態でした！私たちにとってスキャンダルです。キリストのように厳しくはなく、甘く優しい。でも、スキャンダルはスキャンダルです。彼のように振舞うために必要な信仰、単純素朴さ、熱意、確固たる意思などを誰が持っているのでしょうか？まるで斬るように決然とした選択、そして、数々の放棄、そのような彼の業をまねるだけの勇気を一体誰が持っているのでしょうか？

実際、もしも物事の奥底を突き詰めようとするなら、そして、フランチェスコの生き方の土台に何があるのかを知りたいと固執するならば、そこにあるのは *Paupertas* - 清貧 -、と答えるしかないのだと私たちは実感する必要があります。貧しいキリストに従っていた彼にとって、清貧とは王家のように高貴な出自の花嫁なのです。でも、それは本物の貧しさです。つまり、自分自身（内性）の貧しさはもちろんのこと、物的な貧しさでもあります。僅かなもので満足する本当の貧しさ、何も消費しようとしめない態度です。そして、余分なものはすべて手放します。被造物や環境も含めて他の何物かが、それで生きることができるように、それを享受できるように、と手放すのです。

このような生き方は、全体の4分の3を食べて残しながら、実は決して満足できないような私たちの発展の仕方とは全く正反対です。他の人々は？子供を望まず、育てる意欲を喪失し、それでいて高価でむさぼり易いつかの間の物事に対する飢えは絶えず増すばかり。見せかけの代用品である猫や犬などの流行のペットか、ともかくいろいろいな趣味で暇つぶし、新しい生命を生むよりもむしろ、ともかく長生きすることに投資する、そんな後退と退廃という私たちの人間主義と正に逆行しています。他には？それから？この家（人類という家族の家）は存続するのか？もしくは破綻か？もう第三の千年紀

に入っています。商売やインターネット、科学の凱旋的勝利にも拘らず、そして、動く水の上を吹く大聖年の聖霊の息吹にも拘らず、私たちが動揺させる恐れがないとは言えないのです。そして、私たちは、「未来の人」を捜しに出かけます。それが遺伝子工学や空想科学に見出せるとは期待していません。その代わり、高みを見つめましょう。私たちの恐れを超えて、私たちの希望を超えて神は偉大です。もし、神に私たちの恐れも希望も委ねるのなら、私たちの潜在的可能性は想像を超えるものとなります。フランチェスコは私たちにこれを証しするのです。

未来の人、実はもう、神は私たちにそれを与えて下さいました！彼と同時代の人々が、既に、彼をそう呼んでいたのではなかったでしょうか？フランチェスコ、*homo alterius saeculi* - 次の世紀の人 -、即ち未来の人、と。新しいノアの虹として、神御自身のしるしとして、果たされた約束のしるしとして、神はフランチェスコを定められたのです。希望がすたれることがないようにと賜った希望の預言、それがフランチェスコの役割なのです。

著者 :

P. GIULIO MANCINI, ofm
Convento S. Domenico
Piazza S. Dominico, 6
06049 SPOLETO PG

出典 :

Dalla Rivista delle Clarisse d'Italia
FORMA SORORUM
Anno 38,n.4-5
Bimestrale- Luglio-Ottobre 2001

Japanese translation rights arranged with P. Mario Canducci, ofm
through OFM Province of Japan.

発行日：2003年1月30日

翻訳・発行者：

106-0032 東京都港区六本木 4-2-39

フランシスコ会日本管区

